

## 徒然の記 その三

### プロメテウスの火

ゼウスとかプロメテウス、ヘラクレスなどが登場するギリシャ神話を学校の授業で習ったのは、小学校四年生か五年生の時だったと思います。

プロメテウスが、神々の王、ゼウスに命じられ、粘土を捏ねて作った人間は、姿こそ神と同じだったが、ほかの動物のように体を包む毛皮や鋭い牙や爪も無く無力だった。

彼等は、寒さに震え、猛獣から逃れるために洞窟の中に隠れ住み、草や木の実、生肉を食べて露命をつなぐという惨めな暮らしをしていた。

哀れに思ったプロメテウスは、炎を吹いて天空を駆ける太陽の神ヘリオスの馬車から神々の宝である「火」を盗んで人間に与え、使い方を教えた。

人間に「火」を与えることを禁じていたゼウスはこれを怒り、プロメテウスを捕らえてコーカサスの山の頂に鎖でつなぎ、生きたまま大鷲に肝臓を食べさせるという残酷な罰を与えた。

不死身のプロメテウスは、食べられた肝臓が夜になると復活し、死ぬことも出来ずに長い間、毎日地獄の責め苦に苛まれていた。

…太い鎖を引き千切ってプロメテウスをこの苦しみから救ったのは、大力無双の英雄ヘラクレスだった。

これは、教科書に載っていた「プロメテウスの火」のあらすじです。

今でも「火」と言うとすぐ「プロメテウス」を連想してしまいます。

その頃は、ギリシャは海の向こうにある遠い遠い異国でした。

世界の何処へでも大型旅客機でひとつ飛び、という今と違って、当時は、海外へ出かけるのは船が頼りでした。

先生の話をしてくれた神々の住むオリンポスやコーカサスの山々とは、いったいどんなところだろう行ってみたいな、と思いましたが、その頃の貧しい庶民には、長い船旅をすることなどは、夢のまた夢でした。